［特集３］福田靖子賞座談会

～世界に羽ばたく次世代ピアニストを育てる為に～

9月23日（金・祝）東京都内にて、第2回福田靖子賞選考会についての座談会を行った。出席者は特別委員4名（二宮裕子、播本三恵子、松崎伶子各理事、福田成康専務理事）と、演奏研究委員の諫山隆美氏。8月末に行われた福田靖子賞の報告と感想、そして今後の展望等について活発に意見交換された。

福田：本日はお忙しい中お集まり頂きましてありがとうございました。おかげさまで第2回の福田靖子賞も無事に終了することが出来ました。本日は今回の福田靖子賞を振り返りながら、ピティナのコンペティション全体、ひいては今後のピアノ界の展望まで含めて自由に語って頂ければ、と思います。どうぞよろしくお願いいたします。

今年の内容を振り返って

福田：今年の福田靖子賞は生前の福田靖子をよく知るジャック・ルヴィエ先生、リー・カムシン先生、そしてピティナがはじめてお迎えするジョン・オコーナー先生の3名で審査して頂きました。2日間のレッスンはどなたも白熱の内容で、充実したイベントとなったと思っています。この先生方にはコンペティション決勝の審査から引き続いてお願いした訳ですが、それぞれ違った内容を非常によく理解し、ある意味とても楽しんで頂けたようで良かったと思っております。

播本：今年度私たちは決勝でそれぞれ違う級で審査を担当しましたが、何かトピックスありますか？

松崎：G級は海外の先生方と日本の先生方でちょっと見解が違ってしまいましたね。海外の先生はああいう時はかなり自己主張なさるから。

播本：時々国際コンクールなどで、自分が良いと思った子が入賞しない時、どうしても気に入らないと、外人の先生はポケットマネーで賞を出すこともありますよね

諫山：海外の審査員が入って難しいのはそこですね、点数を見るととても独特な審査の仕方をしている場合がある。でも実際に演奏を聴いてみると、なぜそういう点を付けたか、というのは理解できる部分もあるのです。

▲二宮裕子先生

福田：昔はG級、特級と受けて来たが、この頃G級は素通りされてしまうようです。

二宮：ちょうどG級に良い年回りの人がなかなか受けてくれないですね。特にここ数年その傾向があります。

福田：G級が良くならないと将来的に特級の足腰が弱くなると思いますのでそれはちょっと心配です。

諌山：それでも数年前よりは（G級は）良い選曲で受けてくれるようになりました。以前はE級よりやさしいような曲だけ並べ立てる人がいましたが、課題曲の規程を変えましたので、それは無くなりましたね。

播本：G級は受験のリハーサルにはちょうど良いんです。一方レパートリーを作って何かやりたい、という時は特級ですね。そういえば特級の時間規程はもう少しきちんと基準を統一した方が良いと思います。ボリューム不足の選曲になってしまっている人が見受けられました。

諌山：確かに特級では短めでしたね、要項に時間の規程を明文化してあげても良いのでしょうね。

低年齢化の問題

二宮：最近特に思うのだけれど、ちょっと低年齢化が著しくなって来ましたね。特級・G級は高校生のものになり、Jr.G級は小学生のものになった。10年ほど前には、後に日本音コンやその他の国際コンクールで実績を残すような大学生がG級、特級を受けてくれた。でも最近はそういう可能性のある学生が、小さい子に負けるのが嫌だから他のコンクールに流れて行ってしまう。また小さい子達がのびのびと実力を発揮するのは良い事ですが、それが長い目で見て本当に教育に有益であるのかどうか。

松崎：年令の下限を考えてみるという可能性はどうなんでしょう？

諌山：私もそれは生前の福田靖子先生に伺ったことがあるんですが、かなり長い間考えられて、やっぱり下限は設けたくない、というご意見でしたね。

播本：確かに活力が無くなるような気がしますね。中には無理しておちびさんに弾かせている場合もあるかもしれないけど、それは長くは続かない、いつか成長する段階でこれじゃまずい、と判ると思います。基本的には審査員、評価の問題ではないでしょうか。昨年のJr.G級では実際に聴いてみると、その中では金賞を取った方が最年少でしたがやっぱりダントツでした。

松崎：今年年少の子が金賞を取った級を実際に審査した先生にもお聞きしましたが、やっぱり全員の中ではその子が良かった、という事でしたね。

諌山：ちょっと年長だから、といって確実に良い演奏が出来る訳でもないですしね。

播本：そういう意味で特級のように、新作の邦人曲などがあると楽譜を読む力が如実に出るので判りやすいですね。今年グランプリを受賞された金子さんはその意味でやはり際立っていました。達者に弾けるだけではカバーできないものなんですよ。韓国のある先生はCDを聴かせて耳から全部覚えさせる、という指導法をしている人がいると聞いたことがあります。レッスン室には楽器ではなくオーディオがあって、生徒は各室で録音を聴いて覚える、それを覚えこんだかどうかチェックするのが先生の仕事とか。極端な話で

▲諌山隆美氏

▲松崎伶子先生

すが、実際にあることらしいです。そうすると、何が起きるか？つまり譜面から音楽を読み起こせない。録音されていないものはできない、という恐ろしいことが起きるのですね。

松崎：海外へ勉強に行く子も増えましたが、せっかくパリならパリに行ってもレッスン漬けになっていて、いつまでたってもフランス語は全く話せない、という例もあります。ただ単にピアノを弾くためだけに外国へ行く訳ではないと思うのですが。

才能の芽をどうやって育てていくのか

福田：コンペティションのレベルをさらに上げていくためにどうするか、常に検討を重ねていかなければなりませんね。

播本：例えば日本音楽コンクール（以下、日本音コン）にしてもそれほどのレベルの差は無いと思いますよ。

諌山：どちらも一長一短と言えると思います。日本音コンは必要なことを勉強している子が入っている。おもしろいかどうか、というとピティナの方がおもしろいかもしれません。確かにおもしろいことも重要ですが、おもしろければ良いのか、となってしまいますね。

播本：きちんと勉強している子達が、ピティナっておもしろくて若い子なら入る、というふうに見ている、オーソドックスなことをきちんと勉強して来た子が参加しなくなる、それが問題だと二宮先生はおっしゃっているのでは？

二宮：まったくその通り。もちろん私は各級のレベルがアップしていくこと、小さい子がどんどん出て来るのは大変良いことだと思っています。しかし現実問題として、金賞を取った小さい子達はそれからどうするんでしょう？まだオクターヴも届かなかったりするのに。

播本：進路を誤って幼い内から無理な事ばかりさせると、結局は日光ナントカ軍団になってしまう危険性だってありますよね。つまりおサルさんの物真似集団。

諌山：実際入賞者演奏会の希望曲でもとんでもない曲を言って来たりする、指導者がそれをさせてしまうのです。

二宮：そういう場合子供や親はどんどん先へ進みたい、あれもやりたい、これもやりたいんですね。その時に指導者が毅然としてノーと言わなければならないんですが、指導者がOKしてしまっているんでしょうね。

播本：今必要だと思われる曲をまともに勉強していて、それがちゃんと評価されるシステムが必要でしょうね。

諌山：ただ現在色々なコンクールがあるので、ピティナを受けなくてもそれ以外をほとんど皆が受けてしまっています。ピティナに限らずコンクール向けの曲ばっかりやってそれしか弾けなくなっている子が実際にいます。結局どんなコンクールでも仮に優勝者としたってその時点の完成度はそれほどでもない、そこからの成長が重要です。

二宮：日本人の傾向として、神童というのはたくさんいるんです。でもその神童が全部大家になるわけではない。逆に海外だと例えばジュリアード在籍中はヘロヘロだと思っていても、後にぐっと伸びる子がいます。

播本：ヨーロッパでもそう、本格的にやろうと思ったときの意志のもち方が違うのかしら？

諌山：若年化そのものは悪くないと思います、でもその若

年化と伴って間違った方向へ進んでしまっている兆候が無いとはいえない。

二宮：いわゆる他の有名な学生コンクールでも課題曲がすごく難しくなりましたね、小学生がとても弾けそうも無い曲も出ています。

播本：老舗のコンクールが逆にピティナに引き摺られているんでしょうか？

諌山：その他でも小学生にこんな曲を弾かせるのか、という課題がしばしば見受けられます。難易度と音楽の価値が少し混乱しているような気がします。

次の段階の指導者への引継ぎ

福田：優秀な若い才能が出て来た時、それをどうやってその先伸ばしていくか、というのが非常に重要だというお話になっていますが、そうなるといわゆる次の段階の指導者への引継ぎ、という問題を考えなければいけませんね。

播本：どうしても優秀な先生が東京にばかり寄りすぎているようですね。地方から優秀な子がいた場合、それをどうやって受け渡していくのでしょうか。やはり指導者である以上自分の野心のためでなく、その子がより伸びる事を重視してその辺の決断をしなければなりませんね。

諌山：しかし地方の指導者に次へ受け渡す意志があっても、実際に近辺にはそういう先生がいない事も多い。地理的な問題は大きいですね、経済的な負担もあるし。

福田：昔は福田靖子（前専務理事）がその辺の仲介をやっていたのかもしれませんね。例えば、今各方面で活躍しているメンバーが、先生方の所にいらした時にはどういう経緯で？例えば根津さんは？

播本：彼女の場合はお母様が連れていらしたんです、その時は確か小学校3年生。永野英樹君の場合は小学校6年の時までろくにピアノをやっていなくて、でもその後の伸びが大きくて中３の時には学生音コンで全国1位を取っていました。総体に男の子は女の子より少し遅くても大丈夫ですね。

二宮：関本昌平君が入ってきたときは、とても元気で自信たっぷり、猪突猛進で弾いていましたね。（笑）でもその後脱力の事を教えたらそれはとてもよくわかってくれたんですよ。なんだか関本君自身が二宮先生の言うことを聞いていれば絶対大丈夫だと自分で確信してくれたらしい。だから進路について色々な意見も耳に入ったようですが、本人が聞かなかった。

諌山：先生を変わる、というのは確かに微妙な問題を多く含んでいますね。これはチェロの先生の話なんですが、ある先生が自分の弟子には他所に変わりたい子は変わっても良い、でも他所へいったら戻ってはだめ、と言い聞かせて送り出す。つまりそのくらいの自覚を持たせて送り出さないと、駄目だったから、といって皆気軽に言ったり来たりする傾向にあるからです。変わるのは大事だけど、そればかりを強調したら、じゃあ先生を変えたらもっと良くなるのではと右往左往しても困りますね。結局信頼関係がなくなってはだめなんだと思います。

播本：そこにはやっぱり指導者同士のルールがあると思います。よくコンクールの審査員で才能のありそうな生徒に直接勧誘する方もいらっしゃるようですけど、これは一種のルール違反でしょうね。最終的には本人の決断でしょうが、どの先生と出会うかと、あるいは勇気をもって先生を変えるかは、その子の持って生まれた運命と能力ではないのか、と思います。

二宮：有名な先生だったら良い、というものでもないです

▼播本三恵子先生

ね。そういう方は生徒がわんさかいるから一人の子に集中できない。その先生自身によし、この子を育ててやろう、という気がないと駄目ですね。

福田：指導者を選ぶのもひとつの才能、そこにどれだけの情熱を込められるかどうか、ですね。

今後の福田靖子賞

二宮：今後の福田靖子賞を考える時、ますます世界的に高名な方々に加わって頂きたいですね。何しろレッスンと発表会という他に例を見ない形態の選考会なので、まずその成り立ちをよくご説明しないといけない、でもその辺りを納得して頂くと非常に興味を持って頂けると思います。

播本：世界的に有名なピアニストでも、こと教育にかかわるピティナのイベントのようなものだとお願いできる場合がありますね。例えば来年フェスティバルにいらして頂くことが決定したクリスティアン・ツィメルマンとか。

二宮：それはすごい!!お願いしたその方から人脈が広がる事もよくありますね。アーティストもある程度年齢を重ねると、自分のやって来た事で後世に貢献しようという気になるものらしいですから。

播本：福田靖子賞というのは第1位にまとめて大きな奨学金を出すのが良いですね。ただ開催年によって、今回のレベルは前回と比べてどうなのか、というのを判断するのが非常に難しいでしょうけど。

福田：おかげさまで福田靖子の遺志により確保された基金と、それ以外にもゆかりの方々からのご寄付を頂戴していますので、賞金に関しては今のペースで授与

▲福田成康専務理事

していける見通しです。この特別委員の先生方からも毎回のようにご寄付頂いておりますので、あらためて御礼申し上げます。

播本：いずれにしても福田先生の思いがぎっしり詰まった賞ですから、継続して有意義に使いたいですね。

福田：次回は2007年になる訳ですが、もう今から受けてくれそうな方を探し始めています。福田靖子賞の趣旨からしてピティナのコンペティションでの実績が必要ですから、そのためには来年のコンペティションへの参加も含めてお誘いする場合が多いです。実は来年はピティナ40周年、コンペティション30周年にあたりますので、それを記念して全国決勝ソロ特級でのオケ伴奏のコンチェルトも考えています。労力も費用もかかりますが、それによってコンペティションのランクアップがはかれれば、と思っています。

播本：それは楽しみ。費用の問題もありますが、なるべく良いオーケストラと共演できると良いですね。

福田靖子賞はピアノ塚?

福田：これはひとつの笑い話なんですが、生前福田靖子が冗談でピアノ塚みたいなものを作ろうか、などと言っていました。つまりそこに詣でればピアノがうまくなる。（笑）

播本：福田靖子賞がまさにピアノ塚ではないでしょうか?。

全員：そうそう。

播本：もっとも象徴的なもの、としてね。ユニークなシステム（レッスン審査と演奏審査）を備えていると同時に、靖子先生の理念を具現するものだと思います。実際ピティナがあったから実力を発揮できるようになった

先生は沢山いらっしゃると思う。世の常ですが、数が多くなり年を経れば、何らかのゆがみ、弊害が起きてくるのは仕方ないでしょう。ただこれだけ大きくなったピティナが、今後どのように舵をとって音楽を育てていくか、それが課題でしょう。

諫山：長い目で見て、ピティナの歴史の中でどれだけの人材を育てることが出来たか、というのを常に考えていなければいけないんだと思います。

福田：ありきたりかもしれませんが、発掘した若い才能がのびのびと育てる環境を整えていくために今自分達に何が出来るのか、自問自答・試行錯誤の毎日です。本日はお忙しい中長時間にわたり、充実した議論を本当にありがとうございました。

▲2003年度第１回福田靖子賞を受賞した関本昌平さんは、2005年度ショパン国際ピアノコンクールにて第4位入賞しました。（写真は第１回福田靖子賞選考会レッスン審査より）

ジャック・ルヴィエ賞　Jacques Rouvier Prize

今回ジャック・ルヴィエ先生より、2時間の無料レッスンを受講できる、という「ジャック・ルヴィエ賞」をご提案頂いた。選考対象は今回の来日でルヴィエ先生が審査したすべての出場者（ピティナ・ピアノコンペティション全国決勝大会特級／Ｇ級／Jr.G級／福田靖子賞選考会）で、崎谷明弘さん、酒井有彩さん、實川風さん、富永愛子さん（Ｇ級）の４名が選ばれた。

実はルヴィエ先生は約３年前、「レッスンをして、その後コンクールをする」という審査形式を発案して下さり、それが現在の福田靖子賞選考会の出発点となった。そのルヴィエ先生からのコメントを、ここにご紹介させて頂く。

福田靖子賞発案のきっかけは、コンクールで演奏を聴く前に各参加者のパーソナリティを知ること、また短時間ではありますが、我々のアドバイス・指導に対する反応を見ること、という教育的かつ論理的な考えに基づいています。特に後者に関していえば、この試みは大成功であったと思います。私は、彼らほぼ全員の上達ぶりに、驚きを隠せませんでした。

Jr.G級に関しては、本当は５～６人に１位を上げたかったですね。皆才能に溢れており、年上の、あるいはプロの演奏家よりも優れた感性を示した子も沢山いました。ショパンの舟歌やベートーヴェンの悲愴（特に第２楽章）の演奏はよく覚えています。こうした高度な感性が、これからのクラシック音楽を救うのだと思います。

今回は４名に特別賞を授与しましたが、本当は全ての子供達にレッスンしたいところです。でも、今はそれを必要としない子もいるでしょう。

この４名は、それぞれ異なりますが、優れた「音楽」を持っているので、私が彼らを少しでもサポートできればと感じました。それぞれ既に素晴らしい先生方についていらっしゃいますが、時には同じアイディアでも、別の人から別の言葉で示されることは、今後の参考になると思います。これからももっと目（楽譜に対して）や耳（音に対して）、心を開いて、感性豊かに勉強を続けて頂けるよう、この賞を提案させて頂きました。皆さんにお会いできるのを、楽しみにしています。

Jacques Rouvier